

〔『天鼓』昭和五十四（一九七九）年五月号九～一五頁より〕

17 頁 * 不具者 ふくしゃ = 塊害者。

18 頁 * 罪恨 ざいこん = うらむこと。 * 悲歎 ひたん = かなしみなげくこと。 * 濫費 らんび = むやみについやすこと。 むだづかい。

19 頁 * 食欲 じょよく = むさぼつて飽くことをしらないこと。

21 頁 * 泰斗 たいと = 世間から重んぜられる権威者。 * パグウォッシュ会議 = 一九五五年のラッセル・アインシュタインの平和宣言を受け、核軍縮問題など戦争と平和の問題を、科学者の立場から討議するために創設された会議。一九五七年以来、世界各地で開催。

22 頁 * 憨慢 かんまん = おごりたかぶること。

24 頁 * 凝結 ぎょうけつ = ものがこりかたまること。 * 耶蘇教 やそきょう = キリスト教のこと。

26 頁 * なかんずく = いろいろあるなかでも、特に。とりわけ。

27 頁 * 優勝劣敗 ゆうしょうれひ = 生存競争の結果、まさっているものが勝ち、劣っているものが負けること。

* 曙光 しょこう = 暗黒の中から現れはじめる明るいきざし。

現世安稳の証文

—日本山妙法寺 藤井日達山主

英國ミルトンキーンズ仏舍利塔落慶供養法語 —

昭和五十五（一九八〇）年九月二十一日 英国ミルトンキーンズ仏舍利塔御前

南無妙法蓮華經

科学者を覆う無力感

今年八月二十日から六日間、オランダ国ユートレヒト市郊外ブルーケンレンの古城において開かれた、第三回パグウォッシュ会議の最終宣言は、「今の軍拡の傾向に、迅速にして、かつ有効なる手を打たなければ、今世紀中にも、核戦争の大破局が起ころ」と述べた。

また、「人間として、科学者として、人間の生き残る道を提示しなければならない。それは我々の義務である」と言い切つておる。

会期中に開かれたラッセル・AINSHULTIN宣言総会記念講演会に寄せたメッセージ

の中で、日本の湯川秀樹は、「現在の事態を招いた状況について、科学者もその責任を免れ得ない」といった真剣な声である。

六日間、ノーベル賞受賞者をはじめ、東西南北の智者学匠が論議した、このパグウォッシュ会議については、西欧の新聞は、ほとんど皆、ことごとく黙殺して採りあげられなかつた。

ここにパグウォッシュ会議のかかえる大きな問題がある。

この会議に集つた科学者たちには、このまま核軍拡が進行すれば、人類の総破局に陥ることを熟知しながら、なおその危機感をなくすることができないという、無力感に襲われていたからである。

しかしロンドン大学教授にして、広島の八月六日の会議から帰つた、その足でまた、このオランダの会議に出席したロートブラット教授は、「悲観論と楽観論とあるが、もし我々が悲観論の立場に立てば、すべては終わる」と言つた。

以上は、朝日新聞の九月二日号の記事の抜粋である。

題して「科学者を覆う無力感」。

AINシュタインは、ドイツのヒットラーが核兵器を開発することを危険として、アメリカの大統領に核兵器開発を勧め、これに協力した。

アメリカは一九四五年七月十六日に、ニューメキシコ州アラモゴードの試験場で、世界最初の人工核爆発を行い、三週間後の八月六日に、第二の核爆発を行つて、日本の広島を荒廃せしめ、その後、引き続いて、八月九日に、第三の核爆発を行つて、日本の長崎を破壊した。

その惨劇的な殺人破壊は、古今の歴史始まって以来の、未曾有の被害を与えた。

* マッカーサーは東京に上陸早々、意見を宣べて、「日本はすでに、小銃弾一発をも、造る能力を失つておつた。しかし原爆を投下したことによつて、終戦期を早めて、アメリカ兵の多くの死傷者を出すことを止めた」と言って、原爆の残酷なる被害については、何の反省の色も示さなかつた。

続いてアメリカ大統領夫人も、日本に渡つて戦跡を見たが、この原爆投下の犯罪を懲悔する者は、アメリカ人中、だれ一人もいなかつた。唯一人、原爆投下の下す人の共隊だけが懲悔したが、終に彼は精神疾患者となりて死

んだ。

人間の生き残りの道

もしヒットラーが核兵器を開発すれば、トルーマン以上に残酷に使用する訳でもなく、誰が核兵器を使用しても、その災害は同じことである。その残酷なる災害は核兵器の開発にある。

科学文明の進歩にある。

科学の発見する真理は、^{*}人倫道德とは全然無関係のところにある。科学者の開発する技術は、人類の生存とは、何のかかわりもない。彼の長崎に投下せし爆弾が炸裂して、長崎を破壊したという報告を聞いて、拍手して、歓喜せし者は、この爆弾を製造せし科学者連中であった。

悪いなるかな、科学者、呪わるるべき者は科学者である。核兵器を開発せし科学者も、人間並に核兵器の危機の中に、人間の生き残りの道を提示せねばならない。

それが我々の義務であるというが、不幸にして科学文明の中には、政治・経済・軍事等のいずれのところを探しても、人間の生き残る道などはありえない。科学者の無力感は、その正直な姿である。

もし強いて、人間の生き残りの道を探そとすれば、そこにただ一筋の道があるかもしない。

それはただちに、^{*}躊躇することなく、科学者を廃業することである。

政府や軍需会社に雇われておるその生活から、一切、手を切つて、ただ野山を駆けめぐつて、「生き残りたい」と叫ぶことだけが、生き残りの道であろう。

科学者は生き残れる道が、どこにあるかわからないが、あると信ずることがまず第一条件。人を生き残させてくださる、不可思議の力のあるものが、存在すると信ずることが大切である。

われら等を救わんがために、無量の計り知れない、不思議の力を現じ給うものが、あるといふことを信ずる。この信仰的確立が、科学者の無力感などと、大變のことが吹き飛ばしてしまう。

その時に、科学者も皆、宗教人となる。

科学文明の害毒を知ることができるだけに、科学者が最初に、宗教人となり得るであろう。

科学文明の害毒を、直接、人間に執行するものが、すなわち戦争である。

科学文明とは戦争文明である

戦争を職業とする一類の人間を、「軍人」と言う。

軍人は「人殺し」、「殺人官」と言わずして、いつわって「自衛官」と称する。

戦争には、必ず勝つということが期待されねばならぬ。

必ず勝つためには、大量の虐殺をする核兵器を尊重する、軍人が存在する間は、核兵器を廃絶することは不可能である。

科学文明の弊害は、権力の乱用である。

権力を掌握する者を、「政治家」と称する。

権力は軍事力によって得られる。

そこでしばしば、軍人が政治家となる。

政治家の存在するところには、核兵器廃絶は到底望まれない。

*ニクソン大統領は一般教書において、「米国が世界の中において、第一位の強国になることは許されない」と言った。

かくごとき政治指導者の言明は、核戦争を戦つて勝つための兵器を開発する軍事研究に、軍備競争の意義を強制することになる。

また、*アイゼンハワー大統領は、国民への最後のメッセージにおいて、

「注意すべきことは、産業界と軍人が複合体となることだ」と言った。

それに科学者が加わって、核兵器開発が行われている。
どこから止めて良いか、わからなくなってしまった。
詮ずるところ、科学文明とは戦争文明である。

暴力文明であり、殺人破壊の文明である。

殺人破壊の悲劇は、人の心の中の*無明煩惱から起ころ。

猜疑、妬み、不信、
それを根本としてる。

猛獸の爪も、毒蛇の牙も、元來、自己の生存のために、必ずしも必要欠くべからざるものではない。

多くの動物に対して、猜疑と疑いと不信とをいだくところに、爪や牙を磨く必要がある。犬も猫も猛獸である。

コブラも毒蛇であるけれども、一旦これを飼い慣らす時は、いずれも温順な動物となる。飼い主を信頼し、飼い主に帰服するが故に、爪や牙を使用する必要がなくなる。

軍縮會議の敗北の長い歴史

去る八月二十日から、オランダのブルーケンレンの古城に、世界の知識人が集会して、人間の生き残る道を提示せんがために、會議を開いておることを、全ヨーロッパの報道人が黙殺したというが、これは今に始まつたことではない。

AINシュタインが、「人間生存の危機を、もつとも優先的に協議すべし」と警告した時も、ただ、若干の科学者だけが、集会を開くことになつただけである。

原爆が広島・長崎に投下される一年前に、デンマークの物理学者ニールスボーナーは、

*ルーズベルト大統領や、チャーチル首相に手紙を送つて、「緊急にして重大なことは、比類なき兵器が造られておる。一日も早く、この強力なる新兵器の利用を規制する協定を作らない限り、一時の利益が、いかに大きくとも、それ以上、人類に対する脅威が大きくなるであろう」と言つた。

ルーズベルトも、チャーチルも、この話を聞いたけれども、何も採用することはなかつた。

一九四五年六月二十六日、国連憲章はサンフランシスコで調印された。
その使用目的の原則の一として、国際平和と安全保障の意義を宣言した。

同年八月六日、広島に、同じく九日、長崎に原爆が投下された。

一九四五年十月二十四日、国連憲章が発効した時、軍縮がすでに重要な課題であった。国連は原子力管理を確立し、原子兵器の使用と生産を禁止せねばならないという緊急任務に直面し、一九四六年一月、原子力委員会が設立された。

一九六一年に、ソ連・米国が協同して、全面完全軍縮計画を国連に提出した。これは現代の軍縮の道標指針となつてゐる重要な文書である。

一九六一年から、軍縮委員会が開かれて、諸種の協定を結んでみたが、全面完全軍縮の包括的手段が捨てられた。

核兵器の存在自体が、もつとも罪悪であることが、そこで見失われた。かくのごとき会議の敗北の長い歴史を考えるに、軍縮を確立することは不可能に見える。かくて軍縮委員会の会議は、部分的手段の交渉で浪費されて、効果的な軍縮協定に達しなかった。

かくのごとき会議の敗北の長い歴史を考えるに、軍縮を確立することは不可能に見える。国連内部の圧力では、米ソ両大国をして、核兵器の開発、実験、生産を停止させることはできなかつた。

絶望感から人を救い出すもの

しかし失望してはいけない。

軍備競争は不合理的な仕事である。

兵器は新しく開発されたものほど、非人道的である。

戦争は新たなる戦争ほど、一層残酷である。

古来、戦争は至るところで行われたが、その時代相応の戦争の規定があつた。近代戦には、国際法として認められて来たものの、核戦争にいたっては、極悪非道にも、一切の戦争法規をも、踏みにじつてしまつた。

人類絶滅さへも恐れない戦争に、何の法規が行われよう。

戦争、軍備が不合理であり、不道徳であることは、軍人も、産業界も、科学者も、よくよく知り抜いておる。

その上で、軍備競争をするのであろうと思う時に、生き残り論者の、絶望に陥らざるを得なくなる。

一般民衆は、何もなすことなきように運命づけられて見える。
絶望感から、人を救い出すものは、すなわち宗教的信仰である。

科学文明の進歩の結果、核兵器戦争によって、どうしても死なねばならなくなつた人に、蘇生の信念を起こさせ、復活の希望を与えるものがある。
それが、すなわち宗教の「神」と称し、「仏」と称する、絶対的な権威者である。
人類絶滅の大罪悪を起こす者を、「鬼畜」と呼ぶ。

「悪魔」と呼ばれる者も、みな人間の顔をして、人間の中に生活する科学者・軍人・政治家等である。人類絶滅を蘇生せしめ、復活せしめる者もまた、観念妄想の産物ではなくて、人間の顔をして、人間の中に生活しながら、人間の苦しみを救い、人間の社会に、平和をもたらす文化を開き、生命の尊厳を教えて、相互に礼拝せしめ、因果の道理を説いて、自から悪業を離れしめ給う、仏陀世尊も、人間としての寿命は、人間並みでありながら、その実体は常住不滅にして、「永遠に人類を救い守り給う」という約束が、経文に説かれてある。

宝塔湧現の大供養

その救済の約束を信じて、その残された御仏舍利様を求めて、ここ英國ミルトンキーンズのビレン湖畔に、宝塔を建てて供養する。

宝塔湧現の瑞相、いまだ仏教徒なきヨーロッパ、ヨーロッパの中の英國、英國の中の新都市、平和都市ミルトンキーンズに宝塔が建立されるんとする。

二十四カ国の各国市民の中より、数日、あるいは數十日、自から衣類・食料や、布団もたずさえて、勤労奉仕に来た者があり、あるいは宝塔の部分の仏像や、頂上の九輪屋根などを除いて、他の宝塔の塔身を造りあげた者は、日本の仏弟子、わずかに十四名の僧尼の人々によつて、この仕事が完成された。

*奇なるかな、この宝塔落慶供養の式典によつて、英國をはじめ欧州人々の心に、新鮮なる平和の風が吹き始めて、そこに皆、参詣したアジア諸国の仏教国の代表も、喜して、ここに群集し、北美、またソ連の人も参詣した。

おそらくは、仏教史上、宗教史上に、古今いまだかつてなかつた大供養となつた。

核兵器の脅威を解脱する瑞相として示現された、この常住不滅の世を救う仏陀世尊の大神通力の現われと見ることができましよう。

科学文明の放棄、軍備競争を停止せしむることはでき
科学文明の放棄、軍備競争を停止せしむることはでき
科学文明の放棄、軍備競争を停止せしむことはでき
科学文明の放棄、軍備競争を停止せしむことはでき

なかつた。

科学者に、悲観論がここに起つた。

世界人類に、絶望感が起つた。もし人類が生き残らんと欲すれば、まず須らく科学文明を放棄して、別途の文明を創造せねばならない。

すなわち精神文明の展開である。

精神文明は宗教文明である。

宗教文明は佛教文明である。

佛教文明は三帰五戒を教える。

三帰とは、遠きは宇宙天地より、近きは人間社会に対して、尊敬の念を起させしめ、礼拝し、供養せしむる。

その対象を、抽象して、仏法僧の三宝とする。

もし人として、これを尊敬しないならば、破壊が起つて、戦争が起つる。

不殺生戒の功德を信じて

五戒とは、人類の行為に、善と惡との二法があることを指摘し、人をして、惡業を行わしめず、善業を行わしむる。

善業とは何か。

第一に、およそ生命あるものの、生命を守ることである。

惡業とは、第一に、およそ生命あるものの生命を殺すことである。

しかるに、現実の世界の状況は、一個の生命が、他の生命を食つて、その生命を維持して行く組織になつておる。

そこに、どうしても殺生が行われねばならぬ。

この現実を「弱肉強食の法則」という、動物界一般に広く行われている現象である。

これは不殺生戒の禁制するところではない。

人間の生活にも、他の動物を殺して、食料に供する風習があるけれども、不殺生戒は、それを禁制せんとするために、^{*}放生会と称する仏法の祭典を、皆に勧めておる。

科学文明の脅威、核兵器の恐怖といつがじとき、現代の恐怖は、たたこの不殺生戒の大
きなことを「不殺生戒」といふ。

しかし今、不殺生戒の本旨は、生命を維持する以外の殺生を、禁制するところから始ま
る。而して、結局、人類相互の殺し合いを、絶対に禁制せんとするものである。

科学文明の脅威、核兵器の恐怖といつがじとき、現代の恐怖は、たたこの不殺生戒の大
きなことを「不殺生戒」といふ。

破戒の懲罰である。

現代に生き残りの道を探すならば、科学者の楽觀論でもなく、軍縮會議の、軍縮条約・
協定でもなく、ただ仏教の五戒の中の第一、不殺生戒の功德を信じて、これを各々が受
け取る問題を解決せんがために、仏法には因果の道理を説く。

人は、なぜに悪業をしてはいけないか、人は、なぜに善いことをせねばならないか
善業の原因をなせば、安樂の果報を受くる。

悪業の原因をなせば、苦痛の果報を受くる。

これは自然的要求である。

人は皆、じとじとく苦痛を免れ、安樂を求める。

しかるに、善業の原因を作らねばならない。

この規則は歴然として、変更することはできない。

悪業をはしままにしてはがら、しかも、その結果として、安樂を得んと望む、これ
すべて悪業を行つ者は、必ず苦痛の結果が来るとは思はない。

これを「因果撥無の邪見」という。

科学文明は近代國家を作つた。

国家とは、物質的利益を守らんがための機關である。

國家の主権を行使する時は、その物質的利益を守らんがためである。

利益は各国々別々である。

善惡を無視することに安樂はない

「迷信」といふ。

悪業をはしままにしてはがら、しかも、その結果として、安樂を得んと望む、これ
は「因果撥無の邪見」といふ。

これが自然的要求である。

人は皆、じとじとく苦痛を免れ、安樂を求める。

しかるに、善業の原因を作らねばならない。

この規則は歴然として、変更することはできない。

悪業をはしままにしてはがら、しかも、その結果として、安樂を得んと望む、これ
すべて悪業を行つ者は、必ず苦痛の結果が来るとは思はない。

これを「因果撥無の邪見」といふ。

科学文明は近代國家を作つた。

国家とは、物質的利益を守らんがための機關である。

國家の主権を行使する時は、その物質的利益を守らんがためである。

利益は各国々別々である。

そこで競争が起り、戦争が起つ。戦争は勝負があるても、善悪がない。勝たんがためには、善悪を無視する。たとえば、一国の利益、安全を守らんがために戦争をする。

戦争に勝たんがため、核兵器を使用する。核兵器の使用が原因となって、やがて、その一国の利益と安全は、核兵器によつて、破壊するという結果が生じる。

アメリカは、第二次大戦後の一九四五年代の後半では、他のいかなる国から攻撃されて第一に軍事力が強いためであった。けれども、それは第一に地理的条件に恵まれた。一九四五年、核兵器を開発して、日本の広島・長崎とを破壊して、市民を皆、虐殺して戦争に勝利した。

も、敗戦する心配はなかつた。

アメリカは、第二次大戦後の一九四五年代の後半では、他のいかなる国から攻撃されて第一に軍事力が強いためであった。

アメリカは、核兵器使用を人類に対して、大犯罪と思わず、反対に、「和平の守護神」

として核兵器を尊重し、猛烈に核兵器を開発し、蓄積した。

これが原因となつて、ソ連もまた、核兵器を開発した。一九五〇年代中期までに、ソ連は十分な核兵器と長距離爆撃機を持ち、一日に数百万人、乃至數千人を死傷せしむる攻撃をしかけることが可能になつた。一九六〇年代後半には、米国全都市の全市民を、一時間以内で殺してしまう攻撃力を持つことになった。

現在、ソ連のロケットが米国を完全に破壊することを防衛する手段は、絶対に不可能である。

これとは逆に、米国もまた、ソ連の都市を完全に破壊することができる。ソ連はこれを防ぐに、何の手段もない。かくのごとく、米・ソ両国の全部の都市と人間が、限りない危険にさらされている。

広島と長崎を完全に破壊したといふ悪業の原因が、今や北米合衆国全都市を破壊し、全市民を虐殺させるという結果を生まんとしている。

因果の法則は、原因に似たる結果が生ずると説かれる。
因果の道理を信する時
瓜の種を蒔けば、瓜の実が生まる。

それ故に、悪業を作らぬよう、善業を行つことが、その結果として、安全となり、利

その時、初めて、仏教の不殺生戒が受持される。

天下万民皆、仏教信徒となつた時に、眞の世界平和は実現する。

妙法蓮華經に曰く「汝等はもれなく我を以て生むべし。」

「衆生勘足^{かんしゆつ}きて、大火^{だいびやく}に燒^やかる所^{ところ}見る事^{こと}も、我が此^このど土^どは安穩^{あんじゆ}にして、天人^{てんにん}常^{つね}に充^{じゆう}満^{まん}る」

日蓮聖人曰く、
「めうはふひと
ともじやら
はんじやら
といふこと
はなんまいぢう
なむめらほふれんせきやら

科学文明の迷信の悲劇

科学の開発には倫理性がない

科学の開発する真理には、善悪の区別がない。

か
つ
た。

和宇宙文明は、人類が必ずべからざる大悪業としての、殺人破壊を禁制することを知らな

キリスト教会のお祈り

科学文明の迷信から現われた悲劇である。

兵器の恐怖といふ、現代のものとも救い難き状況となつた。

いわゆる反宗教の理論・技術を開発して、止まるところを知らない結果が、すなわち核計算が合えば、いかなる殺人破壊も行われる。

ただ数学的計算があるだけである。

これも天からくじけた奇跡であるといえ、そうありますから、これもとなりに見て
この中に、この寒まれた天気は、英國としては、近代めずらしく奇跡であります。
ことに今のは雨が多い。

それに、この英國の天気は雨模様が多い。

昨日來、雨が降り続いて行くだらうといつ予想がありました。
終わりに臨んで、一つの奇跡がある。

キリスト教会のお祈り

おるとじろに、耶穌教の古い教会があります。

そのお祈りの中に、十一日の宝塔の落慶供養が、お天氣でありますように、教会の
そこに毎日集まつてお祈りがあります。
人々が祈つてありました。

『天鼓』昭和五十五（一九八〇）年十月号「ミルトン・キーノズ特集号」一三二五頁

これが私に伝りまして、人の心に動く姿が、天を動かす不思議の力と現れました。
廃絶に立ち上がるべきことを主張した宣言。一九五五年發表。湯川秀樹を中心とする名の著者が核

31頁 * マッカーサー = アメリカの軍人。元帥。連合軍西南太平洋方面総司令官として、太平洋戦争を指揮。戦後、日本占領連合国軍最高司令官として日本に駐在。占領政策を統轄。

32頁 * トーマン = アメリカの政治家。ルーズベルトの死により、副大統領から第三十三代大統領となり、一九四八年再選。在任は一九四五—一九五三。* 人倫 = 人間の実践すべき道義。

33頁 * 謙讓する = とにかくためらうことなく。* 不可思議 = 考えても腹底までは知りつかない。